

## 知的障害特別支援学校高等部の進路指導における生徒版個別の 移行支援計画：セルフサポートブックの活用とその効果

勘田 陽子（長崎大学教育学部附属特別支援学校）

鈴木 保巳（長崎大学大学院教育学研究科）

石川 衣紀（長崎大学教育学部）

### I はじめに

特別支援学校では、個々のニーズが多様であるため「全体の教育計画」を補う計画として、個別の教育支援計画書のように「個別の〇〇計画書」が作成される。これらの計画書を有効に機能させるために、関係者による支援会議の開催や活用システムの検討とともに、計画作成過程における本人や保護者の参画が不可欠になることが指摘されている（藤井・高田屋, 2017）。しかし、知的障害のある生徒が計画内容に主体的に参画できる仕組みはまだ十分に整備されていない。特に、高等部卒業後の進路先となる事業所へのスムーズな引継ぎのため実施される移行支援会議では、学校の教員や保護者から生徒のことについて事業所へ説明が行われるが、当事者である生徒本人が自分のことを自身の言葉で伝える機会は、これまでほとんどなかった。それは移行支援会議に関する資料を関係する大人たち（学校や保護者）だけで作成していたため、生徒本人はそれらにどのようなことが書かれているのか、どのようなことを進路先に伝えるのか、十分把握できていなかったからである。この状況を改善するため、高等部の進路指導、すなわち移行支援に着目し、実習先や進路先など他機関との引継ぎの場において生徒が主体的に活用できる支援ツールとして、生徒版個別の移行支援計画＝セルフサポートブック（以下 SSB）の作成・導入を進めてきた（勘田・鈴木・石川, 2020）。

特別支援学校高等部の生徒たちは、その多くが「卒業後、自分の強み（得意なこと）を生かし、社会の一員として企業や事業所で生きがいをもって働きたい」と思っている。この思いを実現させるためには、進路先とのマッチングの場において、「自身の長所と短所を理解（自己理解）した上で本人が納得して決定（自己決定）する」ことが求められ、高等部の進路指導ではこの自己決定にむけたプロセスの支援が重要な課題となる。障害のある人々の自己決定に関する研究は、1970年代の後半から、ノーマライゼーションの理念の浸透を背景に始まった。Wehmeyer（2001）は、「自己決定とは、他者に強制されずに自分自身に関する物事を選択し、決定することを意味する」と表現している。また Wehmeyer & Metzler（1995）は、4,544名の知的障害者を対象とした米国の国民消費者調査を取り上げ、「知的障害者は、日常場面であまり自己決定をしていない」と報告している。この知的障害

者の自己決定の機会が少ないことの要因として、Wehmeyer（1998）を参考にした自己決定の 4 つの要素「自己選択」、「自己解決」、「自己主張」、「自己理解」（長澤, 2016）を自身で実現することの難しさがあると考えた。本研究では、進路先とのより良いマッチングという高等部卒業時の重要な自己決定を支援するため、自己決定の 4 つのキーワードから特に「自己理解」に焦点を当てた。「自己理解という心の整理」を行うことが自己決定の基盤となると考えたからであり、これを SSB 作成の基本理念とした。

しかしながら、対象生徒が知的障害であることから、自己理解を促す支援には工夫が必要となる。すなわち、自分の周りにある様々な情報を捉えにくい生徒のため、生徒自身が理解でき、イメージしやすく活用しやすい情報にするための工夫である。そこで SSB 作成に当たっては、イメージしやすい情報の形、つまり情報の可視化を大事にした。SSB は、図 1

に示すように「1 プロフィール」、「2 私の周りのサポーター」、「3 得意なこと・苦手なこと」、「4 現場実習の履歴」、「5 進路決定プロセス」の 5 つのカテゴリーで構成し、シートは合計 16 種類の項目からなっている。カテゴリー 1・2 では特に個別の教育支援計画と内容をリンクさせ、3 は自己理解、4 は現場実習、5 は個別の移行支援計画につながる内容として位置付けた。

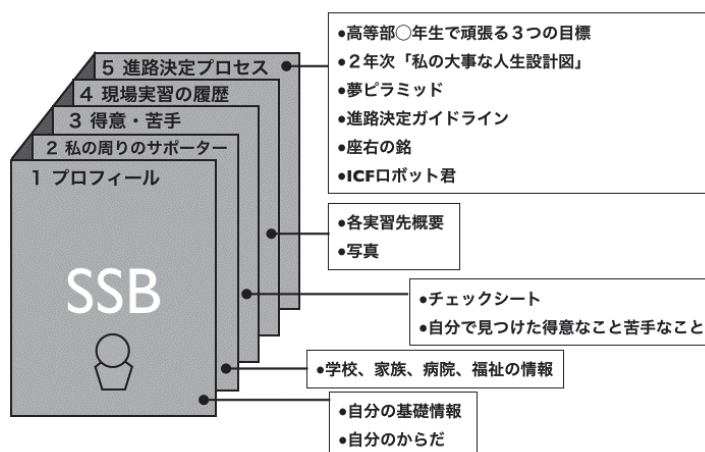


図 1 SSB の構成

SSB は生徒自ら作り上げていくものであること、作成過程では、生徒自身が「自分のことをより知るため」、「自分のことをより周りの人に分かってもらうため」に作成するものであることを授業開始時に毎回生徒たちと確認し、意識付けを図った。併せて、自身に成長や変化が見られた場合は、随時、情報を更新していくことも確認した。

これまで SSB の作成は、筆者が担当していたクラスで作成してきたが、令和 3 年度から A 特別支援学校高等部の教育課程に SSB 作成が位置付けられることとなった。そこで本研究では、SSB の有効活用に向け、作成の効果検証を行うことを目的とした。具体的には、SSB 作成過程における生徒本人や授業者である教員、生徒と共に SSB 作成を行う保護者の意識の変容を検討した。さらに、現場実習先や卒業後の進路先となる関係機関に SSB 作成や活用の意義を周知して外部評価いただいた。

## Ⅱ 方法

### 1 SSB 活用冊子の作成・配付

指導にあたる高等部職員や SSB 作成に協力を依頼する保護者、さらに現場実習や卒業後の進路先となる事業所に向けて、SSB の取組や作成意図などを周知するため、活用冊子を作成した（勘田, 2021）。

シートの名称と概要

(1) 自分の基礎情報  
～自分に関する基本的な情報の把握～

自己決定の4つのキーワード(該当箇所を白文字で表記)

キーワード 自己選択 自己解決 自己主張 自己理解

作成場面(白文字で表記)と作成手順

作成場面 職業(授業) ホームルーム 総合的な探究の時間(授業) 家庭(自宅)

【作成手順】  
○生徒自身が分かる範囲で記入する。→現時点でどれくらい記入できるかを把握する。  
○分からない箇所は、個別的教育支援計画の写しを見せ、転記する。  
○療育手帳を実際に見ながら、区分や更新日を確認する。

活用場面(白文字で表記)と留意点

活用場面 進路相談 現場実習 外部機関との引き継ぎ その他

【留意点】  
○履歴書など自分の情報を書いたり確認したりする際、このページを活用する。  
○変更が生じたときは、その都度、アップデートすることを忘れないようにする。  
○家庭に持ち帰った際、内容に間違いがないか保護者に確認を依頼する。

このシートをSSBに採用した理由(筆者のつぶやき)

【シート設定の理由】  
☆「これだけは知っておいてほしいこと」を集めました!

実際のSSBシート(記入例を示しています)

I-1(i) 自分の基礎情報

<名前(ふりがな)>  
附属 特男 (ふぞく とくお) 男 女

<生年月日>  
平成 1 Δ 年 〇 月 □ 日

<住所> 〒 852-XXXX  
長崎市～町XX番△号

<電話番号>  
( 095 ) 〇〇〇 - XXXX

<療育手帳>  
区分: AI 次回更新日: 令和〇年 Δ 月 日

<( )手帳>  
区分: 次回更新日: 年 月 日

<緊急連絡先>  
( 090 ) XXXX - ΔΔΔΔ <姓: 母 >

図 2 SSB 活用冊子

図 2 に活用冊子のページ構成例を示す。見開きの左ページには、SSB の各シートの記入例を載せた。どこに何を記入するかが分かるように、項目はできるだけシンプルなものにした。右のページには、Wehmeyer (1998) を参考にした自己決定の 4 要素（長澤, 2016）「自己選択」「自己解決」「自己主張」「自己理解」をキーワードとして挙げ、各シートの該当箇所を白文字で表記した。また、作成場面や活用場面も白文字で表記し、作成手順や留意点を簡単に記載した。更に下段には、このシートを SSB に採用した理由を「筆者のつぶやき」として載せた。

### 2 SSB 作成対象生徒と作成時期

対象は、A 特別支援学校（知的障害）の高等部生徒 22 人とした。作成時期は、1・2 年生については 202X 年 4 月から翌年 3 月までの期間を SSB の作成に、3 年生については高等部入学時から卒業時までの 3 年間を SSB の作成と活用に充てた。

また、夏季・冬季休業中などに SSB を自宅に持ち帰らせ、保護者が参画する機会を設けた。

### 3 教員からの意見聴取

令和 3 年度から SSB 作成が高等部の教育課程に組み込まれたことから、実際に SSB 作成の授業(総合的な探究の時間及び職業)を行う高等部教員 6 名に対して、生徒の様子や自身の意識の変化を聴き取った。

### 4 保護者へのアンケート

SSB の作成協力に併せて、保護者に、現場実習期間中の生徒の家庭での様子や作成参画の感想を問うアンケートを実施した。普段の学校生活と現場実習期間中の様子を「体力」、「会話量」、「意欲」の 3 項目で比較していただいた(図 3: 5 件法)。アンケートは年 2 回実施したが、本稿では、高等部の生徒全員がそれぞれの事業所で実習を行う後期(11 月)現場実習後に実施したアンケート結果(対象者 22 名)を示す。

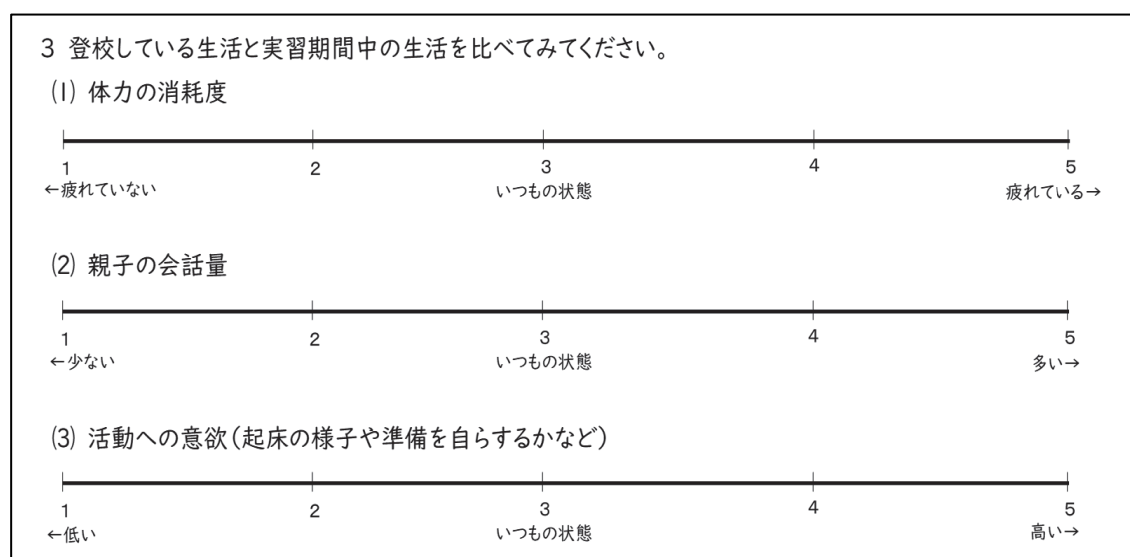


図 3 保護者アンケートの項目

### 5 関係機関へのアンケート

現場実習や卒業後の進路先となる事業所に対し、SSB の内容や感想を問うアンケートを実施した。9 月から 10 月に活用冊子と共にアンケートを配付し、11 月末頃までを締切りとしてはがきを返信していただく形で行った。20 か所中 10 の事業所から回答を得た。アンケートの内容は、SSB の項目の中で現場実習や卒業後の受入れに際して役立つと思ったシートについて、また、現段階の項目以外で引継ぎ時に知りたい情報などについて問うものであり、最後に感想などを自由に書いていただいた。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 生徒の変容

1 年次から SSB の作成に取り組んできた 3 学年の生徒は、新型コロナウイルス感染症の影響で 2 年次の前期現場実習が中止となったり、実習期間が短縮したりするなど、イレギュラーな中で進路決定をしなければならない状況であった。しかし、どの生徒も自分自身でしっかり進路の決め手を考えた上で、自分がやりたいことを周囲に伝え、本人・保護者・学校と三者が同じ方向を向いて進路決定に至ることができた。SSB の作成がその一助になったのではないかと考える。



写真 1 SSB に取り組む様子

一方で、今年度から SSB 作成に取り組んでいる 1 学年の生徒には、内面の変化が見られた。本生徒が所属するクラスでは、日記を毎日の宿題として出しているが、ある日、担任から一人の生徒が書いた日記を見せてもらった。そこには、こう記してあった。

「今日は、総合で“身の周りのサポーター”をしました。サポーターがいると、自分ができないことをやってくれたり、自分が大変な時に助けてくれたりするので、自分の気持ちがリラックスできます。」

本生徒が取り組んだ「私の周りのサポーター」のシートでは、「自分を支えてくれる人が家族や学校以外にいることを知る」ということを狙いの一つにしている。本生徒は、その意図をしっかりと感じ取ることができており、更にサポーターがいることで安心感につながるということも感じ取っていた。自分の周りに味方がいることを知ることで、卒業後の不安が軽減され、安心感を得ることができたようである。不安感がなくなることや安心感を抱くことは、後に新しいことに挑戦してみようという気持ちにつながるのではないかと期待している。

#### 2 教員の意識変化

高等部教員へ聴き取りを行ったところ、SSB の作成によって生徒理解が深まったことや気持ちの表出が難しい生徒の進路に対する思いを知ることができ、生徒一人一人により合った実習先の選定ができた、などの声が挙がった。また、職員室内での様子にも変化が見られるようになった。普段から担任・副担任間で生徒のことについてよく話をしているが、授業時の生徒の様子や本人が SSB のシートに記入した内容について、どのような思いで書いたかなど、細かい部分について話をすることが多くなった。また、その様子を聞いて他の職員が受け持ちの授業の様子について伝えるなど、会話の輪が広がるようになった。



### 3 保護者の意識変化

保護者からはまず、SSB の作成協力に併せて SSB 作成に参画した感想を自由記述形式で書いていただいた。そこには、SSB 作成に携わることで我が子のことをより深く考える機会となったことや家庭内でも進路に関する話題が出るようになったとの感想があった。

表 1 は 2 学期の後期現場実習後、1～3 年生の保護者にアンケートを実施した結果である。3 つの項目において、「いつもの状態と違う」と回答した数を示している。なお、実習先ごとに 1 枚ずつアンケートを依頼したため、回答数は対象者数よりも多くなっている。(1)の体力については、緊張や立ち作業などが続くことで、いつもより疲れていると感じた保護者が多かった。(2)の会話量については、他の 2 項目と比べて変化の数としてはさほど多くはなかったが、数値として「5 多い」をつけている保護者が多く見られた。アンケートの最後に設けた自由記述欄には、実習先での様子が詳しく記述されていたり、実習先で我が子がどのようなことに

表 1 保護者アンケートの結果

項目	レベル	結果
(1)体力の消耗度	いつもより疲れていない	7/27回答
	いつもより疲れている	12/27回答
(2)親子の会話量	いつもより少ない	3/27回答
	いつもより多い	7/27回答
(3)活動への意欲	いつもより低い	1/27回答
	いつもより高い	15/27回答

困ったか具体的に書かれていたりした。このことから、現場実習について生徒自ら、あるいは保護者から話をする機会が増えたことがうかがえる。(3)の意欲については、3 項目の中で最も変化を感じたと回答した保護者が多かった。現場実習を経験することでやる気が湧いたのか、家庭でも様々な活動（手伝いなど）に意欲的に取り組むようになったと我が子の変化を感じた保護者が多かった。これは、アンケートを通じて我が子を見る具体的な視点を示したことで、一支援者としての我が子を見る目に変化が現れたことを表していると考えられる。

### 4 関係機関の外部評価

関係機関には SSB の取組や内容に対して外部評価をしていただくためアンケートの依頼を行った。まず、各シートの中で実習や卒業後の受入れに際して役立つと思われるものを選んでいただいた（表 2）。すると、各カテゴリーからそれぞれ

一つずつ 8 割以上の支持を得たシートがあった。「1 プロフィール(2)自分のからだ」、「2 私の周りのサポーター(4)病院」、「3 得意なこと・苦手なこと(2)私が見つけた得意と苦手」、「5(6)ICF（国際生活機能分類）ロボット君」の 4 つであった。「4

表 2 関係機関へのアンケート結果

カテゴリー		シート	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
1	プロフィール	(1) 基礎情報	○	○			○	○	○	○		○	7
		(2) 自分のからだ		○	○		○	○	○	○	○	○	8
2	私の周りのサポーター	(1) 学校			○	○	○						3
		(2) 家族				○	○	○		○		○	5
		(3) 福祉	○			○	○	○		○	○	○	7
		(4) 病院	○		○	○	○	○		○	○	○	8
3	得意なこと・苦手なこと	(1) チェックリスト		○		○	○	○	○	○		○	7
		(2) 私が見つけた得意と苦手	○	○	○		○	○	○	○	○	○	9
4	現場実習の履歴	(1) 記録	○			○	○	○	○	○	○		7
		(2) 写真	○										1
5	進路決定プロセス	(1) 高等部〇年生で頑張る目標			○				○			○	3
		(2) 人生設計図	○			○	○		○	○	○	○	7
		(3) 夢ピラミッド	○				○	○	○	○			5
		(4) 進路決定ガイドライン	○			○				○			3
		(5) 座右の銘				○	○						2
		(6) ICFロボット君	○		○	○	○	○		○	○	○	8

現場実習の履歴」については、現場実習時に生徒の様子を直接見ていただいたこともあり、今回は数が少なかったものとする。健康面については、追記で「不安障害や食物アレルギーについても知りたい」という意見をいただいた。職業生活も含め日常生活を送る上で、心身共に健康でいるということは、誰にとっても大切なことである。特に、知的障害をもつ生徒たちは、自分の体調について周囲に詳しく伝えることは容易なことではない。それゆえ、言葉で伝えることが難しい状況でも、イラストや記録などで自分の身体について記しておくことは、とても大切なことである。また、「得意と苦手」に関するシートについては、最も多くの支持を得た。「得意を生かした仕事に携わることは、仕事をする楽しさや、やりがいを感じることにつながり、その結果、仕事を長く続けていくことにもつながるのではないか」、という意見をいただいた。支援者が的確に、より詳細に本人の特性を把握することで、作業面や環境面においてより良いサービスの提供につながると考える。そして、「ICF ロボット君」は、本人の情報が 1 枚のシートに整理されていることから、支持を受けたと考える。今回このシートは、卒業前に関係者で行う移行支援会議時に本人からの資料として活用した。詳細は後ほど触れるが、自分のことを相手に伝えるツールとしてとても役立つものとなった。

アンケートでは、現在のシートの他に引継ぎ時に知りたい情報について自由に答えていただいた。既存の項目で十分という意見がほとんどであったが、「将来に向けた本人や保護者の意向があると良い」という意見をいただいた。SSB は、本人のみならず保護者も作成に参加するということをコンセプトとしている。現在、保護者が直接 SSB 作成に参加しているのは、カテゴリー 1・2 の部分のみである。保護者は、高等部卒業時の進路決定という部分に強い思いを抱いているが、一方

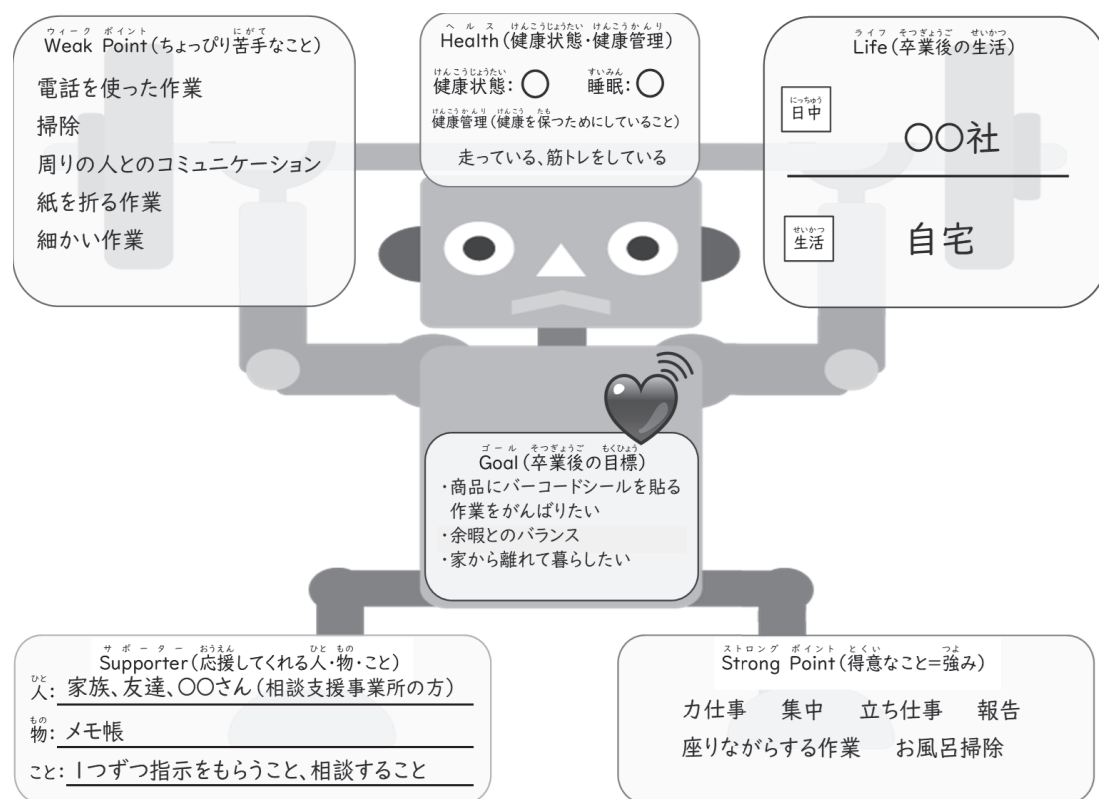


図 4 ICF ロボット君（生徒が記入した内容を記載）

で我が子の人生の先々のこともしっかりと見据えている。そこには、「親亡き後」のことも当然含まれる。そういった思いを本人や在学時の身近な支援者である学校が把握しておくこと、そしてそれを踏まえて進路を一緒に考えていくことはとても重要であると感じた。

アンケートの最後には自由記述欄を設け、感想などを書いていただいた。SSB を評価してくださる声が多く挙がり、取組の意図が伝わっていることを感じる声も聞くことができた。今後の参考になる意見として、「人生のステージごとにロボット君の姿は変わっていくのだろう」という意見があった。「ICF ロボット君」（図 4）のシートは、高等部 3 年間のまとめとして記入するシートと位置付けていたが、学年が終わるごとに 1 年間のまとめとして活用することも効果的だと感じた。進級するタイミングで自分の情報を整理し、記録することは自己理解を深める上で意味のあることと考えた。更に、卒業後も例えばモニタリングの時期などと併せて、本人が自分を振り返る機会を作っていただくなど、進路先にも継続して「ICF ロボット君」の活用に取り組んでいただくことも可能ではないかと感じた。この点については、その可能性を探りながら、今後関係者と検討を進めていきたい。

卒業後の進路先となる事業所への周知活動の中で、事業所で使用している利用者の情報収集様式を紹介していただいた。記入済みの用紙を見せていただきながら情報交換する中で、余暇に関するチェックリストを目にした。社会人として生活する上で、自分の力を発揮できる仕事に携わることはもちろん大事だが、余暇（楽しみ）が充実していることも同じくらい大切である。余暇（楽しみ）をもつ



ことで、仕事上の失敗や悩みなどが軽減されると共に、仕事に対する意欲向上にもつながると考える。実際、職業の授業の中でも余暇に関する題材を取り上げて学習を進めているが、現段階で SSB の中に余暇に関する情報は、十分に取入れられていない。今回、関係機関との情報交換の中で改めてその必要性に気付かされると共に、事業所との連携強化の重要性も再認識した。

## 5 移行支援会議

SSB を 1 年次から作成してきた高等部 3 年生は集大成として、進路先との移行支援会議時に「ICF ロボット君」(図 4) のシートを使って自分のことについて説明する機会を設定した。前述したように、これまでの移行支援会議では、本人の情報について学校や保護者が説明するばかりで、当事者である本人が話をする機会はほとんどなかった。筆者は長年、この矛盾にもどかしさを感じており、SSB の作成を始めたきっかけの一つでもある。本人が自分の気持ちをまとめたシートを活用して、周囲の人たちに自分のことを知ってもらう機会をもつことは、卒業後の新たなステージへ踏み出す際にとっても意味があることだと考える。実際の場面では、緊張しながらも得意なことや苦手なこと、卒業後の目標などについて、一生懸命自分の言葉で伝える姿を目にすることができた。説明を終えた後は、安堵の表情や達成感を感じたような表情を浮かべていた。同時に、これまで抱いていた卒業後の不安や緊張が少し和らいだような様子も見られた。進路先の方からは、「受入れの前に本人の思いや卒業後の目標を聞くことができて、今後の支援の参考になり大変良かった」という声をいただいた。高等部卒業がゴールではなく、新たなスタートラインに立ったことを感じさせる機会にもなったと考える。

## IV まとめと今後の展望

SSB の作成並びに活用の発案は、当事者である生徒本人が個別の教育支援計画作成に主体的に参画するものを期待したものであった。実際に活用してみると、期待どおりの成果を生み出し、本人と SSB が掛け合わさることで、段階的に本人からの発信が増えていき、そのことで周りの支援者も個別の教育支援計画を運用しやすい環境が整えられたことから、有効に機能させる方法であることを確認す

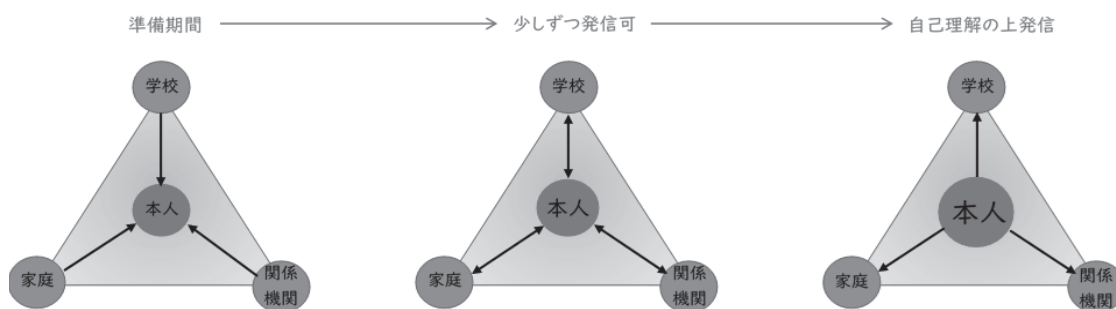


図 5 当事者参画への 3 段階

ることができた（図 5）。また、保護者の協力は、当事者の参画をより促すこととなった。更に、外部評価として進路先となる各事業所からも、本人や保護者のみならず周りの支援者にとっても SSB によって本人の特性など分かりやすいと感じた、といった評価を得ることができた。同時に、「本人や家族の将来に向けた意向があるとなお良い」といったように SSB の更なる発展を期待する声も得ることができた。SSB は、「自分に成長・変化が見られたときには随時更新していくもの」と生徒たちに伝えてきたが、SSB の内容自体も今後アップデートを重ね、更に充実したものにしていきたい。

最後に、SSB の活用場面として今回は移行支援会議での活用を試みた。今後は現場実習の事前挨拶（打合せ）時など活用場を増やしていき、早い段階から進路先となる事業所に SSB を通して生徒のことを広く知っていただけることを期待する。更に、卒業後も継続して SSB を活用していただけるように今後も積極的に啓発活動に取り組んでいきたい。

## 謝辞

本研究に協力くださりました A 知的障害特別支援学校の生徒、保護者、高等部の先生方並びに関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

本研究は、令和 2 年度研究企画推進委員会プロジェクトによる助成を受けて行いました。謝意を表します。

## 文献

- ・藤井・高田屋（2017）：個別の教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策～特別支援学校教員に対する質問紙調査から～, 秋田大学教育文化学部研究紀要, 教育科学部門 72, 93-101.
- ・長澤（2016）：知的障害のある児童生徒の自己選択・自己決定を支援する (<http://www.ed.niigata-u.ac.jp/~nagasawa/2016123.pdf>) 2022 年 3 月リトリブ
- ・Wehmeyer, M. L. & Metzler, C. A. (1995) How self-determined are people with mental retardation? The National Consumer Survey. *Mental Retardation*, 33, 111-119.
- ・Wehmeyer, M. L. (1998) Self-determination and individuals with significant disability: Examining meaning and misinterpretations. *Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps*, 23, 5-16.
- ・Wehmeyer, M. L. (2001) Self-determination and mental retardation. *International Review of Research in Mental Retardation*, 24, 1-48.
- ・勘田・鈴木・石川（2020）：個別の教育支援計画・移行支援計画の運用における知的障害当事者の参画についての提案－高等部進路指導におけるセルフサポートブックの作成－長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 第 19 号, 39-48.
- ・勘田（2021）：セルフサポートブック（SSB）活用冊子～特別支援学校高等部進路指導のために～